

## ふくしおおさか

～ 出かける つなぐ 創る～



©TOMONORI TANIGUCHI 2018  
この絵は、さまざまな“ちがい”をもつ人びとが、互いに認めあえる共生社会をイメージしています。



ともに過ごし、  
ともに支える

## 焦点

Fukushi Osaka Column

長きにわたり府社協を導いてこられた井手之上会長が、6月の定時評議員会を最後に退任された。常務理事時代を含め13年。特に新型コロナウイルスという未曾有の事態の中で取り組んだ特例貸付の実施や施設間の支援体制の整備は、先の見えない不安の中で法人の果たすべき役割を力強く前へとすすめてくれた。

そして、もう一つ。知る人はきつと頷くであろう“少し長め”の挨拶だ。近頃は「話す」と長くなるから」と照れ気味に前置きされていたが、その言葉の一つひとつには、福祉への思い、向きあい方、私たちへの期待が込められていた。

困難な時代を共に乗り越え、数えきれない言葉と背中を導いてくれた井手之上さんに心から「ありがとうございました」と伝えたい。

【も】



# ともに過ごし、 ともに支える

## ～子どもと家族の「やりたい」に寄り添う TSURUMIこどもホスピスの歩み～

日本で初めてのコミュニティ型こどもホスピスである、TSURUMIこどもホスピス。

重い病気や障がいのある子どもと家族が、病院ではない場所で安心して自分らしく過ごせる居場所として、遊びや交流、休息の時間を届けています。寄付により運営しており、無料で利用することができず。

今回は、代表の高場秀樹さん、スタッフの西出由実さん、山内弥生さんにインタビュー。大阪市鶴見区に拠点を構え10周年を迎える今、これまでの歩みやこれからの活動について、お話を伺いました。

### 10年間を振り返って

活動のきっかけは、2009年に、イギリスのこどもホスピス「ヘレン&ダグラスハウス」の創始者を招待した講演会でした。高場さんと西出さんは観客の一人として講演会に参加していました。「定型のサービスをあらかじめ用意するのではなく、目の前の家族にあわせた柔軟な支援を行いたい」という思いから、公費が入らない寄付型のこどもホスピスを日本でも広めたいと考えました。同じ思いをもった有志の面々が集い、

ピクニック当日、涼しい風が吹く緑豊かな中庭で、お弁当を食べたり、怪獣の水鉄砲で遊んだりする家族の姿がありました。みんなの愛がかたちになった瞬間に立ち会い、「何気ない時間を過ごすことが貴重なのだと気づき、これでもいいんだ」と思った」と高場さんは話します。


### 友として関わる

病気によって友人と関わる機会が少なくなると、孤独や苦悩を感じやすく、友人の大切さを見失ってしまうことも。そこで、スタッフは友人として関わり、日常会話から興味や関心を一緒に見つけることを心がけています。ホスピスは、「やりたい」ことを「できた！」にするだけでなく、できていた「こと」を取り戻すための場所でもあります。

また、病院で過ごす子どもたちは、日常的に「患者」の役割を担いますが、こどもホスピスでは特別な役割を担うことはありません。「子どもたちにとって自分らしくいられるこの場所で、自分たちは友のように関わっていききたい」と高場さんは語ります。

### 地域との緩やかな融和

こどもホスピスが当たり前にある社会の実現をめざすTSURUMIこども

LTC（)にある子どもたちにとってやさしい社会をめざす活動がはじまりました。

活動当初は拠点をもち、場所を借りての季節イベントや旅行、通学のサポートなどを行っていました。その後、企業による基金に応募するなどしてホスピス設立に向けて資金を確保し、2016年に鶴見区にTSURUMIこどもホスピスが誕生しました。

高場さんは「暗中模索の日々だった」と当時を振り返ります。当時はこどもホスピスの存在が浸透しておらず、国内に参考になる取り組みはほとんどない状態でした。さらに、日本ではLTCにある子どもが多くが大きな病院で過ごしているのに対し、イギリスでは家庭や地域で子どもたちを支えるといった文化の違いもありました。それでも、ひと家族ひと家族との関わりを大切に、病気を治す立場ではなく、家族・医療従事者と共に、病気に伴う苦痛を取り除く活動を続けてきた結果、徐々にホスピスの利用者は増えていきました。

### 「やりたい」を「できた」に

ホスピスでは子どもの「やりたい」を「できた！」に変える取り組みを行っています。ホスピスができてすぐの頃、LTC

もホスピスは、地域との日頃からのつながりを大切にしています。ホスピスの敷地内には著名なアーティストが制作したアートを設置し、地域に開放しています。敷地内にアートが広がることで子どもがアートに触れる機会を得るだけでなく、地域の人の心にもアートを染め込む空間になるとともに、ホスピスに興味をもってもらうきっかけにもなります。

また、関係機関やボランティアとの連携も欠かせません。医療分野との密な連携はもちろん、学校教師や社協などの専門職、病気の子どもをきょうだ



にある子どもと家族からピクニックの依頼がありました。スケジュールの調整が難しく、一度は断りましたが、「次の機会があるかわからない」とスタッフで話しあった結果、依頼を受け入れることにしました。

### LTC (Life-threatening conditions)

小児がんをはじめとした命に関わる重い病気や障がいなどにより生命を脅かされる状態。

いに対する支援を行うNPO法人や、親を亡くした子どものグリーフケアを行う団体と連携しながら、多方面から子どもとその家族へのサポートを行っています。

スタッフや登録ボランティアは、保育士・教師・看護師などさまざまな経験をもち、利用する方々が安心して過ごせる環境づくりが行われています。

### 感謝を伝える一年にしたい

TSURUMIこどもホスピスは今年で開設から10周年を迎えます。10年前と比べると、こどもホスピスの存在





は広まっているものの、全国の病院の  
数に対する設置数はまだ少ない現状に  
あります。「私たちは嵐のなかで家族  
と一緒に立つことしかできない。それ  
でも、その風雨を一緒に受けることが  
できる」と西出さん。「家族の抛りど  
ころになることができる」と、山内さん  
はホスピスの可能性を語ります。10年  
間で培ったノウハウを全国のホスピス

TSURUMI  
こどもホスピス



TSURUMIこどもホスピス  
のHPはこちらから  
ご覧いただけます



に提供するなど、こどもホスピスの先  
駆けとして活動してきた実績を元に、  
日本での普及を後押ししていきます。  
また、7月1日には、10周年を記念  
したチャリティコンサートを開催。  
ミュージカルを通じてこどもホスピス  
の存在をもっと知ってもらい、寄付アク  
ションをはじめとした活動の協力者を  
増やしていく。このような地域の人たち  
で支える「コミュニティ型」のこどもホ  
スピスとしての、活発な活動展開にも  
注目が寄せられます。  
「これまでと変わらずより良いケア  
を届けるだけでなく、今年も応援して  
くれた人々に、ありがとうを伝える一  
年にしたい」と高場さんは話します。  
LTCにある子どもたちにとってもやさ  
しい社会に向けて、TSURUMIこ  
どもホスピスの取り組みは続きます。

## 大阪府社協 令和7年度決算報告

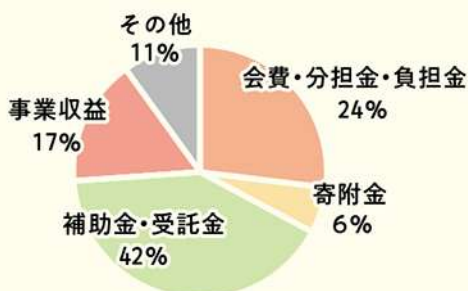
一般会計の収入額は33.84億円、支出額は  
32.69億円でした。

会費、共同募金配分金、寄附金、補助金・受託金  
などを活用し、市町村域における福祉施設・社協・民  
生委員・児童委員などとの包括支援体制の構築、福  
祉人材の確保と育成ならびに定着の支援、総合的  
な権利擁護支援体制の構築に向けた取り組みをす  
すめました。

大阪・関西万博におけるステージ発表やブース展  
示、大阪しあわせネットワーク10周年関連事業、  
民生委員・児童委員の一斉改選など、積極的にPR  
活動を行い、情報発信に関連して2,330万円を支  
出。また、福祉関係者の研鑽・交流の場として事務  
所ビルの空調設備を更新しました。

事業報告、決算の詳細は本会ホームページから  
ご覧いただけます。

### ● 一般会計の事業活動収入の内訳



### ● 一般会計の事業活動支出の内訳

